

# 歴史の否認

## 植民地主義史研究に見るイタリア歴史修正主義の現在

小田原 琳

### 目次

1. 「歴史の政治的使用」
2. 否認された歴史
  - (1) 『否認された歴史』
  - (2) ファシズムの読みなおしと歴史叙述をめぐる変化
3. 《良きイタリア人》の復活
  - (1) イタリア植民地主義史
  - (2) 植民地主義史研究の転換
4. 歴史研究の「公的」環境

### 1. 「歴史の政治的使用」

イタリアにおいては、2000 年前後から歴史修正主義の文脈で、「歴史の政治的使用」ないし「公的使用」*uso politico/pubblico della storia* という表現がしばしば用いられるようになった。「使用」*uso(use)*という語には、「濫用・悪用」*abuso(abuse)* という意味が込められている。「政治的」と「公的」というふたつの形容詞が等価であることも、イタリアにおける歴史修正主義をめぐる現象をよく表現している。それは、公的なものがつねに政治的に専決されるという単純な意味においてではない。ここで問題になっているのは、歴史叙述を産出するという行為が、歴史を書く人びとと、歴史を読む人びとという、ともに歴史を創り出す共同体を構成する人びとのおかれている公共圏の磁場を離れることができないということである。歴史修正主義という現象につきものの、保守派政治家たちによる歴史叙述の攻撃は、そうした公共圏をつくりだしているのではなく、その結果として生まれている。アンジェロ・デル＝ボーカ編『否認された歴史 修正主義と歴史の政治的使用』<sup>1</sup>は、この問題を考えていくための呼び水にな

るかもしれない。この論集は、修正主義の特質である歴史の平準化に向きあい、おもにファシズム体制と第二次世界大戦、戦後の第一共和政の誕生を対象として論じながら、ここ 20～30 年の公共圏の変質に対して問題を提起する。小論ではこの論文集のなかでも、近年研究状況が大きく変化している植民地主義にかんする論考に重点をおきながら、イタリアにおける歴史修正主義が現在どのような状況にいたっているのか、その背景と影響を考察したい<sup>2</sup>。

### 2. 否認された歴史

#### (1) 『否認された歴史』

編者のデル＝ボーカは、1960 年代半ば以降長きにわたって、イタリアの植民地主義にかんするほとんど唯一の研究者として、数多くの著作を発表している歴史家である。リビアやエチオピアにおけるイタリア軍の戦略爆撃や住民の大量虐殺などの残虐行為、禁止兵器である毒ガスの使用について初めて明らかにし、それによって右派系ジャーナリズムや退役軍人協会からの激しい攻撃にさらされてきた<sup>3</sup>。これらの人びとは、植民地にお

<sup>2</sup> 第二次世界大戦において同盟国であったドイツ、イタリア、日本は、過去の戦争責任とのかかわり方をめぐってつねに相互に比較の対象とされている(たとえば石田憲の近著『敗戦から憲法へ』(岩波書店、2009 年)は、三国それぞれの戦後体制の選択と憲法制定過程を比較しながら分析したものである)。人種主義や侵略戦争、植民地支配の過去をめぐる歴史の「見直し」としての歴史修正主義についても同様である。本論中で後述するように、ムッソリーニ失脚後の連合軍との休戦協定と「レジスタンスによる自力解放」を御旗に、戦後は敗戦国としてではなく迎え、ナショナル・アイデンティティを形成したイタリアも、人種政策や侵略戦争、植民地政策のなかで行われたさまざまな非人道的行為の責任を逃れられるわけではない。この、戦後史の端緒におかれたねじれがつねに歴史叙述や自己認識の参照点とされるという、イタリアの〈戦後〉の固有の経験を検証しつづけることは、日・独・伊の戦後史を比較するうえで必要不可欠であると同時に、「敗戦国」というその比較の枠組そのものの有効性も問うだろう。

<sup>3</sup> この非難と侮辱と脅迫については、アンジェロ・デル＝ボーカ編著(日本語版監修・高橋武智)『ムッソリーニの毒ガス 植民地

<sup>1</sup> Angelo Del Boca(a cura di), *La storia negata. Il revisionismo e il suo uso politico*. Vicenza, Neri Pozza, 2010

ける行為の責任を否認し、できるかぎりその重大さを軽減しようとする。その意味では、近年には修正主義者たちによってくりかえされているこうした想起の仕方は、植民地主義に関しては戦後長らくとられてきた態度であったということができらる。イタリア政府が植民地侵略の際の毒ガス使用について調査委員会を設置し、使用を公的に認めたのは、1996年のことであった。しかし、この事実が歴史家による歴史叙述にも、政府の公式見解にも現れなかったのは、それが隠蔽されていて、だれも事実を知らなかったからではない。デル＝ボーカの植民地主義に関する最初の著作、ファシスト政権がエチオピアを植民地化したエチオピア戦争を扱った『アビシニア戦争 1935～1941』<sup>4</sup>に対して、同戦争で中佐として小隊を率い、後に将軍となったエミリオ・ファルデッラは、デル＝ボーカの仕事を「左翼の脆弱で非国民的」な主張と呼び、同時にこう書いた。

いずれにせよ、一連の残酷な出来事はすでに周知の事実であり、一部は避けることもできただろうが、その信憑性を疑うつもりはない。しかし、何が引き金となったかにも目を向けるべきであろう…。残念ながら、周知のごとく戦争とは殺戮であり恐怖であり、いずれの戦争も例外ではありえなかったのだから。<sup>5</sup>

すなわち、事実は知られていたが想起はされず、それによって事実のもつ意味が否認されてきたということである。この記憶の抑圧 *rimozione* のメカニズムは、歪曲や偽造とともに、デル＝ボーカの論集が対決している修正主義の特徴のひとつである。

長らく植民地主義の忘却と闘ってきた編者が、近年の歴史修正主義的現象と対決するのは自然なことであったといえる。本書では、編者の他、10人の歴史家たちが、修正主義による「偽造とそ

こから生じる被害」を明らかにすることに取り組んだ。まずは本書に収録された論文を概観し、それらが共有する修正主義批判を検討しておこう。

近代史家でジャーナリズム研究者であり、イタリア版『記憶の場所』<sup>6</sup>の編者でもあったマリオ・イスネンギ「過去たちがよみがえる一互いに相いれない国民統合の記憶」<sup>7</sup>は、リソルジメントと国家統一が近年ファシズムとレジスタンスの関係について行われているのと同様に、複数の勢力間の権力闘争として描かれるようになりつつある状況を論ずる。イスネンギはそれらの叙述が、歴史研究のきわめて基礎的な要件——準拠した史料を示す、註をつけるといった——を満たさず、「一般読者のために」を言い訳にしながら、歴史的知を尊重せずに生産されていることも指摘している。

アフリカ植民地主義史研究の大家であるニコラ・ラバンカ「『良きイタリア人』はなぜ戻ってきたか——イタリアの膨張主義の歴史をめぐる近年の見直し」<sup>8</sup>は、そもそも長らく植民地主義史の研究が存在しなかった状況をふりかえると同時に、ようやく生まれつつある植民地主義にかんする歴史叙述が、今日歴史叙述をとりまく環境にどのように規定されているかを論じている。ラバンカの問題提起には、後ほど詳しく触れたい。

近現代史家で、共産党所属の下院議員でもあった（現在は共産党を離れているが、積極的に政治的発言をつづけている）ニコラ・トランファリア「ファシズムの20年」<sup>9</sup>は、1922年10月末から43年7月までの20年にわたるファシズム体制をめぐる評価のひとつの極を形成することになった歴史叙述の責任を追及する。それは、戦後のファシズム／ムッソリーニ研究を代表する歴史家で

戦争におけるイタリアの化学戦』（大月書店、2000年）所収のデル＝ボーカ「真実のための長い闘い」に詳しい。

<sup>4</sup> Angelo Del Boca, *La guerra d'Abissinia 1935-1941*. Roma, Feltrinelli, 1965.

<sup>5</sup> デル＝ボーカ『ムッソリーニの毒ガス』16～17ページより引用。

<sup>6</sup> Mario Isnenghi(a cura di), *I luoghi della memoria*. 3 vol. Laterza, Roma-Bari, 1996-97. フランスで刊行されたビエール・ノラ編『記憶の場所』プロジェクトに触発されて編まれたイタリア版『記憶の場所』については、拙稿「イタリア版『記憶の場所』のおかれた〈場所〉」（東京外国語大学海外事情研究所『クアドランテ』第11号、2009年4月、39～45ページ）を参照いただきたい。

<sup>7</sup> Mario Isnenghi, 'I passati risorgono. Memorie irconciliabili dell'unificazione nazionale' in Del Boca, *La storia negata*. 以下、本書の引用・参照の場合は書名を省略する。

<sup>8</sup> Nicola Labanca, 'Perché ritorna «brava gente». Revisioni recenti sulla storia dell'espansione coloniale italiana'.

<sup>9</sup> Nicola Tranfaglia, 'Il ventennio del fascismo'.

あるレンツォ・デ＝フェリーチェの、イタリア・ファシズムは「やわらかな権威主義」であり、その暴力性は二次的な要素であるという修正主義的解釈である。ジョルジョ・ロシヤは「ムッソリーニの戦争 1940 年から 43 年」<sup>10</sup>で、エジプトやリビア侵攻、エチオピアでの戦争、ギリシャ侵略における敗北や住民虐殺の記憶は〈抑圧〉され、一方エル・アラメインの戦いや対ソ戦での敗北は、「正確な文脈を欠いた栄光の神話」として想起されると指摘し、根拠のない修正主義以上に〈抑圧〉のメカニズムを問題視した。ミンモ・フランジネリ「修正され、いつでも使用可能なムッソリーニ」<sup>11</sup>は、ジャーナリズムのなかで戦後すぐにはじまったムッソリーニの伝記への関心の高まりを扱う。イタリアの代表的な保守派ジャーナリスト、インドロ・モンタネリ（1909～2001）は、1946 年に『善良な人ムッソリーニ』というパンフレットを出版している。そのタイトルに示されるように、終戦直後からはじまったムッソリーニ表象は、好意的とすらいえるものであった。そこでは彼の「人間」としての側面に注意が向けられ、「良き統治者」として描き出されている。ファシズム期のエリートたちが続々と出版した手記もこの傾向を補強した。人種法や反対者への抑圧に触れることなく旧体制の指導者を描くことは、彼らにとって、そしてファシズム体制に合意を与えた多くのイタリア人にとっても、むしろ好都合なものであった。ムッソリーニに冠された「善良」という形容詞は、ファシズム期のイタリア国民を表象する《良きイタリア人》というレトリック（後述）と響き合っている。

ルチア・チェーチ「カトリック問題とイタリアーヴァティカン関係」<sup>12</sup>とエンツォ・コッロツティ「ショアーと否認主義」<sup>13</sup>はユダヤ人虐殺についての、カトリックやイタリアの歴史叙述、ジャーナリズムの沈黙を問う。

アルド・アゴスティ「制憲協定の敵—修正主義

とイタリア共産党の脱正統化」<sup>14</sup>、ジョヴァンニ・デ＝ルーナ「修正主義とレジスタンス」<sup>15</sup>、アンジェロ・ドルシ「修正主義から転覆主義へ—レジスタンス（と共和国憲法）に対する攻撃」<sup>16</sup>は、ファシズム体制の崩壊後、新たな政体と憲法の制定とその性質という、近年の修正主義が基本的な標的としてきた問いを論じる。

## (2) ファシズムの読みなおしと歴史叙述をめぐる変化

1946 年に発足したイタリア共和国は、錯綜した状況から生まれた。1943 年秋、ファシズム体制内部のクーデターによって、植民地侵略の功労者であったバドリオ將軍を首班とする内閣が樹立される。バドリオ政権は連合軍と休戦協定を結んだ後、国王ヴィットーリオ＝エマヌエーレ 3 世一家とともに、首都ローマを捨て、連合軍支配下の南部布林ディジに逃亡する。一方、反ファシズム陣営の諸政党は、反ファシズム・ドイツ軍からの解放をかかげてレジスタンスを展開する国民解放委員会を結成した。国民解放委員会は国王とバドリオ政権を批判しその正統性を否定していたが、共産党指導者トリアッティの提案を入れて翌 44 年、バドリオ政権と妥協し、サレルノで国民統一内閣の形成にいたる。半島北部ではいまだドイツ軍およびムッソリーニがサロ湖畔に樹立したイタリア社会共和国（サロ共和国）軍と、レジスタンスや連合軍の戦闘が継続するという混乱のなか、戦後の国家政体についての議論をひとまず棚上げにして、国家機構の復興が進められた。1945 年 4 月、ドイツ軍に占領されていた北部諸都市はレジスタンスによって自力解放を達成する。翌年実施された政体選択の国民投票では君主制にかわって共和政が選択され、同時に実施された制憲議会選挙（女性を含む普通選挙が実施された初めての選挙であった）の結果、キリスト教民主党を第一党とし、社会党・共産党がつづく、制憲

<sup>10</sup> Giorgio Rochat, 'La guerra di Mussolini 1940-1943'.

<sup>11</sup> Mimmo Franzinelli, 'Mussolini, revisionato e pronto per l'uso'.

<sup>12</sup> Lucia Ceci, 'La questione cattolica e i rapporti dell'Italia con il Vaticano'.

<sup>13</sup> Enzo Collotti, 'La Shoah e il negazionismo'.

<sup>14</sup> Aldo Agosti, 'La nemesi del patto costituzionale. Il revisionismo e la delegittimazione del PCI'.

<sup>15</sup> Giovanni De Luna, 'Revisionismo e Resistenza'.

<sup>16</sup> Angelo D'Orsi, 'Dal revisionismo a rovescismo. La Resistenza (e la Costituzione) sotto attacco'.

議会が誕生した。そして、キリスト教民主党の親米路線、マーシャル・プラン受け入れのための経済政策で制憲議会内でのイデオロギー対立が深まるなか、反ファシズムを唯一の共通基盤として、47年末、共和国憲法が制定されるにいたった。

「この20年、20世紀イタリア史の多くの部分が、ふたたび議論の対象となっている」が、そこに顕著なのは「執拗な憎しみが反ファシズムとレジスタンスを襲った」ことであり、一方「ファシズムとサロ共和国に対しては非常に甘い調子」<sup>17</sup>で語られることであった。ドルシはこうした類の議論を発表する人びとを皮肉をこめて「レジスタンスの探求者」と呼ぶ。彼らは、歴史のひだのなかに、隠されたものを探し求める。「ただし、それが政治的あるいは商業的利用に該当するならば、そして、とりわけその「隠されたもの」が腐敗臭を放っていたり、歴史叙述が獲得してきたもの、すなわち〈左派の歴史〉をさかさまに転覆させうるのであったりならば」<sup>18</sup>。ドルシはこうした手法を、修正主義の極限として、「転覆主義」*rovescismo* という新たな用語で呼ぶ。

論考を寄せた歴史家たちは、チェーチをのぞいて30～40年代生まれであり、「すでに数十年にわたってイタリアのもっとも質の高い大学で教えており、それぞれが各分野でもっとも優れた歴史叙述を生みだしてきたと考えられている」<sup>19</sup>。碩学ばかりである。編者のデル＝ボーカを含めて60年代から活躍しており、彼らの知的背景は明らかに左派的であるし、それは戦後のイタリア知識人としてめずらしいことではない。先述した終戦前後の状況や、戦後に徐々に編集され、刊行されたアントニオ・グラムシの諸論考の影響のもとで形成された人文学的な知の環境は、歴史研究においては「ミクロストーリー」（大文字の政治史ではなく、微細なリアリティのなかに分け入るイタリアの代表的な社会史）をはじめとして良質の歴史叙述を生みだしてきた。しかしその一方で、ムッソリーニの伝記やファシズム体制のエリートた

ちの言い訳めいた自伝が戦後すぐに出版されたように、早くも人びとは、ある一部分に触れずに過去を想起する方法を編み出しつつあった。本書による批判の最大の標的である歴史家デ＝フェリーチェは、66年から97年にかけて全4巻8冊という大部のムッソリーニ伝を刊行した。その第3巻でファシズムが〈合意〉を獲得していたという概念を打ち出し、『ファシズムについてのインタビュー』（1975年）や『赤と黒』（1995年）でそれをさらに推し進めた。70年代半ば、その見解は大きな議論を呼び、主として彼に対する激しい批判が巻き起こったというが<sup>20</sup>、今日の論争を踏まえてふりかえれば、たんにデ＝フェリーチェ個人をめぐる論争事情にとどまらず、静かではあったがもっと大きな潮流のなかにあったことだったといえるのかもしれない。デル＝ボーカはデ＝フェリーチェが著作『合意の時代』（1974年）でエチオピア戦争に言及しながら、それが残忍な方法によった主権国家の侵略であることにほとんど注意を払わないことを批判し<sup>21</sup>、トランファリアはデ＝フェリーチェの提示したファシズム解釈を「甘ったるいヴィジョン」と呼んで、彼自身はイギリスのイタリア近現代史研究の大家デニス・マック・スミスとともに、イタリアのファシズムは「残忍な現代的独裁、ヨーロッパのファシズムの長子であり、権力を獲得するまでのヒトラーとドイツの国家社会主義にとっての重要なモデル」であったことを、60年代から訴えつづけてきたと述べる<sup>22</sup>。

デ＝フェリーチェがローマ大学教授で職業的歴史家であったことと、この15年のイタリア政治の劇的な変化を受けて、本書の歴史家たちからの批判はなお一層厳しい。デル＝ボーカは、90年代半ば、デ＝フェリーチェがジャーナリストによるインタビューに答えた『赤と黒』で、専門的な歴史叙述のルール——脚注を付し、ビブリオグラフ

<sup>17</sup> De Luna, p. 295.

<sup>18</sup> D'Orsi, p. 332.

<sup>19</sup> Del Boca, 'Introduzione', p. 27.

<sup>20</sup> 秦泉寺友紀「『レジスタンスから生まれた共和国』——反ファシズムと戦後イタリアのナショナル・アイデンティティ」185ページ（佐藤成基編著『ナショナリズムとトランスナショナリズム変容する公共圏』法政大学出版局、2009年）。

<sup>21</sup> Del Boca, p. 14.

<sup>22</sup> Tranfaglia, p. 109.

ィを批判的に読み、証言を精査すること——を離れて発言しはじめたとき、これを厳しく批判した。デ＝フェリーチェはこのインタビューのなかで、「人びと **popolo** を誹謗することによって自己憐憫にひたる」知識人たちを非難し、「学派」や政党や、歴史叙述の流行などに自己同一化せず、歴史家がなんの媒介もなく「人びと」 **gente** と向き合う歴史家として発言することによって、職業的歴史家と歴史の公的使用とのあいだの関係の発展へと積極的に向かってゆくべきであると述べていた<sup>23</sup>。

こうしてデ＝フェリーチェは、修正主義が、第一共和政から第二共和政への移行過程にある断絶の指標であることを指し示したのである。修正主義はこの政治的局面に、〈新しい秩序〉を築く不可避の要請にこたえることを旗印として乗り込んできた。そこにおいて、近い過去の〈読みなおし〉、すなわち第一共和政の人びとや政党、アイデンティティ・パラダイムから正統性を剥奪しようという明白なねらいをもって読みなおすことによって、同時に自分たちの主張を正統化しようとするのであった。<sup>24</sup>

イタリア共和国のナショナル・アイデンティティをめぐる修正主義的論調、それに対する批判については、日本でもいくつかの論考が出されているが<sup>25</sup>、デ＝ルーナのことばは歴史学における修正主義と、90年代半ば以降の新自由主義への明確な政治的転換とが軌を一にすることをはっきりと指摘している。

とくに留意したいのは、本書の歴史家たちは、デ＝フェリーチェやエルネスト・ガッリ＝デッラ＝ロツジャ（ペルージャ大学）、ディーノ・コフランチェスコ（ジェノヴァ大学）といった（修正

主義の）職業歴史家たちが、政治的に偏向しているということを批判しているのではないという点である。その批判は、これらの歴史家たちが、「ふつうの人びと」 **popolo, gente** の名の下に、職業としての歴史叙述のルールを捨てたことに向けられている。以下では、さらにこの問題について、デル＝ボーカとラバンカの議論を参照しながら検討したい。

### 3. 《良きイタリア人》の復活

#### (1) イタリア植民地主義史

2011年1月27日、ホロコーストの犠牲者を追悼する「記憶の日」にニューヨークで開かれたあるシンポジウムで、「イタリア人によってもっとも積極的に忘れられている過去」と指摘されたのが、イタリアの植民地主義であった。たしかに、イタリアの戦後歴史学において植民地主義は、本書の用語をもちいるなら、もっとも強い〈抑圧〉にさらされているテーマといえるだろう。

19世紀末、チュニジアの保護領化をめぐるフランスに敗退したイタリア政府は、エチオピアへの進出を企てる。イタリア総合海運会社が所有していたアッサブ（エリトリア）を購入し、東アフリカへの植民地進出を開始した。エリトリアの植民地化後、エチオピアに侵入するが、1896年アドワでの敗北をもって、エチオピアから撤退する。しかし東アフリカに対する侵略を諦めたわけではなく、1908年にソマリアを植民地化した。さらに、1911～12年には対トルコ戦争によってトリポリタニア・キレナイカを取得している（のちにこの地域をリビアと改称した）。トルコからはその後ギリシャ・ドデカネス諸島も割譲させた。第一次大戦ではイタリア半島北東部への領土を拡張した。1922年に誕生したファシスト政権は植民地拡大に積極的で、1930～31年には一部支配にとどまっていたリビアの全土「平定」に向かい、抵抗する民間人10万人を強制収容所に移送し、疲労や栄養失調、病気などでその大半を死亡させた。1935年には宣戦布告なくふたたびエチオピアを侵略し、36年、首都アディス＝アベバを占領し、皇帝ハイレ＝セラシエはイギリスに亡命して、イ

<sup>23</sup> De Luna, p. 316.

<sup>24</sup> Ibid., p. 318.

<sup>25</sup> 村上信一郎「知識人と政治」馬場・岡沢編『イタリアの政治』早稲田大学出版部、1999年；石田憲「イタリアにおける戦争の記憶」『千葉大学法学論集』17(4)、2003年；秦泉寺友紀「イタリア修正主義論争の構造——ネーションをめぐる相克」『現代社会理論研究』第15号、2005年他、一連の論考を参照されたい。

タリア国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ3世を皇帝とするエチオピア帝国が創設された。1939年、ドイツとともに第二次世界大戦に参戦すると、アルバニアおよびギリシャに侵攻し、アルバニアにはファシスト政権を樹立し、イタリアとの同君連合とした。しかし、41～42年にかけてのアフリカにおける連合国軍の反攻や、43年の連合軍との休戦により、これらすべての植民地を失った。

終戦後、イタリア共和国政府は旧植民地を再獲得するための外交戦争に敗れたのち（ちなみに、自由主義者、左派、新旧ファシストを問わず、旧植民地保持には積極的であった）、この問題について公式に語ることを避けるようになった<sup>26</sup>。戦後もっとも早く政府が公式に植民地問題に取り組んだのは、1952年に議会に「アフリカ調査委員会（アフリカにおけるイタリア事業調査委員会）」を設置したときであった。しかし委員24名のうち15名は元植民地官僚や、イタリア地理学協会（19世紀末から20世紀初頭にかけて幾度もアフリカ探検を実施して、膨張主義の宣伝を積極的に担った）の会員や、カトリック系でアフリカへ宣教師を派遣する活動をおこなっていた大学教授など、確信的なアフリカニストからなっていた。膨大な史資料を利用できる環境にありながら、50巻にわたる大部の調査報告『イタリアにおけるアフリカ』では、リビアやエチオピアにおける毒ガス使用や、エチオピアでの残虐行為には触れていない。国家によるこの編纂事業は、ただ、イタリアによる植民地化がもたらした利益を強調し、同時代の他の植民地主義と比較してイタリアのそれが「多様」であり、「例外的」であったことを示すためにおこなわれた、「国家の修正主義」にほかならなかった<sup>27</sup>。

一方、歴史研究における植民地主義研究においても、その〈抑圧〉は大きかった。戦後しばらくのあいだ、イタリアの海外膨張にかんする唯一の歴史は、アフリカ調査委員会のメンバーでもあつ

たチャスカが1930年代に編纂したものしかなかった<sup>28</sup>。ジョルジョ・ロシヤらが資料集として出版したものをのぞけば<sup>29</sup>、1976年から87年にかけてデル＝ボーカが著した『東アフリカにおけるイタリア人』（全4巻）がはじめて、イタリアの植民地事業の全貌を、植民地主義的でないやり方で提供したものとなった。その後もデル＝ボーカやロシヤが議論を積み重ねるのに対して、歴史学界はきわめて消極的な反応——沈黙または無視——で答えるという状況が90年代までつづいていた<sup>30</sup>。

## (2) 植民地主義史研究の転換

歴史叙述や政府の公式見解が言語化されないというかたちでの記憶の〈抑圧〉状況では、過去の歴史認識の「見直し」という意味においての「修正主義」は、植民地主義史の研究には存在しなかった、ということすらできるかもしれない。しかし90年代後半以降の「ファシズムの遺産との部分的な決別」と同時に生じた「記憶の政治学」<sup>31</sup>において、植民地主義史研究の状況も大きな変容をこうむった。その変化は二方向に向かっているように見える。

ひとつは、従来の〈抑圧〉を継承する方向である。この傾向には、政権の座についた右派の政治家たちによる歴史叙述批判——「マルクス主義寄

<sup>28</sup> 宗主国全般の傾向としては、すでに植民地政治や植民地史研究にたずさわっていた研究者たちは、アフリカ・アジア諸国の歴史と制度についての、「より清潔な」研究＝地域研究へと沈黙のうちに移行したといつてよいだろうが、イタリアではそうした流れは大きなものではない。Labanca, pp. 78-9.

<sup>29</sup> J.-L. Miège, *L'impérialisme colonial italien de 1870 à nos jours*. Paris, Société d'édition d'enseignement supérieur, 1968; Giorgio Rochat, *Il colonialismo italiano*. Torino, Loescher, 1973.

<sup>30</sup> また、先述したように、退役軍人協会は自己防衛的な反応を示した。エリトリア植民地から帰還した軍人とその子弟のための雑誌(*Mai taciti*) 2009年春号の特集は『植民地主義的修正主義? けっこう、だが行き過ぎないように』であった。そのなかで、ある執筆者は、「繰り返します。植民地戦争のあいだ、どちらの戦列にも、行き過ぎも非道もなかったことは誰も否定できません。かの地に暮らし、働き、開発し、教育していたイタリア人々を、何度もイペリット・ガスを使用したあげくに道を切り拓いた「憎い植民者」と定義するのは、イデオロギー的な盲目によって導かれた愚かさだと思います」と、驚くべき自己肯定を述べたという。Labanca, p. 74.

<sup>31</sup> Enzo Collotti, 'Prefazione' in Istituto nazionale per la storia del movimento di liberazione in Italia, *Fascismo e antifascismo. Rimozioni, revisioni, negazioni*, a cura di Enzo Collotti, Roma-Bari, Laterza, 2000, pp. x-xx.

<sup>26</sup> 他のヨーロッパ諸国とことなり、43年の休戦によってすべての植民地を失っていたために植民地解放戦争を経験しなかったこともそれを後押しした。Labanca, p. 78.

<sup>27</sup> Del Boca, p. 12.

りすぎる」という批判——が大きくかかわっていた。デル＝ボーカによれば、2000 年以降、右派政党国民同盟やフォルツァ・イタリア、これらの政党の連合体である自由の人民（2008 年の総選挙のために結成された政党連合、のち政党）の政治家たちは、歴史の教科書として用いられるような多数の書籍を槍玉にあげ、それを「検閲」することを提案した。検閲は実行されなかったが、社会民主党のウォルター・ヴェルトローニ議員が、こうした右派のことばには「不寛容とゼノフォビア、無教養と人種差別、閉鎖性とエゴイズムのごた混ぜ」があったと指摘するような状況が広がったのである<sup>32</sup>。こうした緊張と前後するように、

才能の貧弱な歴史家の増殖が見られた。彼らはイタリア国民の歴史の核心的な地点について、過酷なエピソードは省いて甘口に味つけしたヴァージョンを提供しようというあけすけな意図を抱いて勢い込んでいた。それはひとつの時代の再構成というよりは、おとぎ話に似たようなものであった。<sup>33</sup>

イタリアでは、先述したインドロ・モンタネッリやアッリーゴ・ペタッコ、アルド・デニャーコといったジャーナリストが、アカデミーではない世界で歴史書を多く発表している。いわゆる「正史」では中心的に取り上げられることのない歴史の周縁にある存在に光をあてるような著作もあり<sup>34</sup>、一種の知的・文化的役割を担っているとは思われるが、その膨大な作品群はどれも軽い読み物仕立てになっている。簡単なビブリオグラフィを備えただけの、「多くの誤謬、多くの遺漏、正確でない判断や評価が満載された」それらの作品のひとつである『小さな黒い顔—帝国の征服の歴史』（2003 年）でペタッコは、エチオピアに 30 万人以上の死者をもたらした侵略を、必要かつ緊急の事

業であったと主張し、皇帝ハイレ＝セラシェを「利権にめざとく、血に飢えた、残忍な奴隷商人のラス（エチオピアの王侯の称号）」と非難している<sup>35</sup>。「小さな黒い顔」*Faccetta nera* とは、エチオピア戦争（第二次、1936 年）当時流布した流行歌のタイトルからとられている。それは、「奴隷たちのひとりである黒人の娘よ…ぼくらがきみといっしょになるときには、ぼくらはきみに別の法律と別の王を与えるだろう…ぼくら黒シャツ隊は、きみを解放して斃れた英雄たちの仇を討つだろう」という歌詞をもつ、エチオピア戦争を専制政治からの解放戦争、19 世紀末にやぶれた帝国主義の夢の再興と位置づける歌であった<sup>36</sup>。このようにしてペタッコは、イタリアの植民地主義は何も特別なものではなく、その残虐行為も「時代のモラル」に照らし合わせれば性急に批判することはできないと、擁護するのであった<sup>37</sup>。これらの歴史読み物は、植民地主義の歴史の受容可能な一部を記憶にとどめることで、不都合な一部を忘却しようとする、いわば〈隠蔽記憶〉のメカニズムを示しており、政治的に表明された〈抑圧〉の欲求を補強する機能をもっている。

しかし、植民地主義の叙述において従来型の抑圧が継続される一方で、90 年代になると、植民地主義の研究に参入する若い世代の研究者は増加するという、新しい展開が見られるようになる。ファシズム期に成長した世代の歴史家たちが舞台を去るのにもなって、史資料の独占状態が解除され、そのことによって量的にも、視点の面でも、多面的な研究が可能になったからである。これにより、自由主義期からファシズム期にいたるまで、植民地政策がイタリア史においてもってきた枢要な役割によりやく目が向けられるようになったことをラバンカは評価している<sup>38</sup>。英米仏の研究者との共同研究が増えたことも成果といえよう<sup>39</sup>。ただしラバンカは同時にそこに問題点

<sup>32</sup> 「コッリエーレ・デッラ・セーラ」紙、2000 年 11 月 11 日。

<sup>33</sup> Del Boca, p. 19.

<sup>34</sup> ペタッコはムッソリーニの評伝やイタリア社会共和国側で戦った若者たちの物語の他、統一時のナポリ王国の王家であったブルボン朝や、19 世紀半ばに千年王国運動を率いて蜂起したラッザレティなどを取り上げている。デニャーコはイタリア史のさまざまな場面を南部から見る作品で知られる。

<sup>35</sup> Arrigo Petacco, *Faccetta nera. Storia della conquista dell'impero*. Milano, Mondadori, 2003, p. 44.

<sup>36</sup> 上村忠男『カルロ・レーヴィ『キリストはエポリで止まってしまった』を読む—ファシズム期イタリア南部農村の生活』平凡社ライブラリー、2010 年、162～3 ページ。

<sup>37</sup> Petacco, op.cit., p. 187.

<sup>38</sup> Labanca, p. 81.

<sup>39</sup> Patrizia Palumbo(ed.), *A Place in the Sun. Africa in Italian Colonial*

も指摘している。

ひとつには、イタリアのアフリカ研究者が不足しているだけでなく、ソマリア、エリトリア、リビア、エチオピアといった旧植民地の側の研究者の研究状況がいまだ多くの困難にとりまかれており、そのため、研究に着手しようとしても、現地の、現地語で書かれた史料よりも、宗主国側の史料が多く用いられてしまうという、植民地主義史研究につきものの構造的な問題がある。また、イタリアにおいても、大学制度や就職先の問題で、若手研究者は増えているとはいえ、その総数はまだかぎられている。

このような外的な要素にくわえて、研究の質にかかわる内的な問題も見られるという。

〔研究状況の〕革新が植民地関係の責任についての歴史へとひろがる一方で、少なからぬ研究者がふたたび、ときには一方的に、イタリアによる植民地化の功績を強調する傾向に向かっている。

植民地における都市計画や近代建築の実践などについて、それらがどの程度まで適用されたのか——都市計画における「グリーン・ライン」（人種による居住圏の分離）の存在、公共建築等がかぎられた範囲での機能的な近代建築など——ということについての検証のないまま、近代の実験場として植民地が利用されたとその意義だけを評価することで、「温情的で強欲でない植民地主義」というかつての語りの類型が、若い研究者の歴史叙述のなかに戻ってきているというのである。また、若い世代による研究に、先行世代の仕事——忘却や抑圧をうながした、あるいはそれにあらがいつつ展開された植民地主義研究——を正面から評価する作業がほとんどできていないという問題も見られる<sup>40</sup>。90年代以降の新世代の仕事の意義は否定できないものであり、したがってこれらの研究を「修正主義」と呼ぶことはで

きないとしても、それが脱政治化とでもいうべき傾向を内包していることを指摘することはできないのではないだろうか。

90年代以降の植民地主義史の研究における、一方での〈抑圧〉の継承、他方での新世代の研究者の増加という、これらふたつの展開は、研究の蓄積という観点からいえば対極にある。しかし、どちらも、ファシズムの過去、植民地主義の過去をめぐる戦後まもなく登場した《良きイタリア人》‘bravo italiano’、《良き人びと》‘brava gente’という表象を否定するものとはなっていない。《良きイタリア人》とは、ファシスト内部での政権交代であった（しかし当時は、「解放」として大歓迎された）「宮廷クーデター」以降<sup>41</sup>、急速に強まっていった表象である。善良で、人情があり、人種主義政策を含めて基本的にはファシズムに汚されていないイタリア人というイメージはそれ以前からあったが、政権移行後には連合国との外交交渉のなかで、ドイツと対比させるかたちで強調される必要があった。イタリア人はファシズムの犠牲者であり、レジスタンスによって「再民主化」されたという物語が、43年以降はマスター・ナラティヴとなってゆく。43年秋から45年春にかけて、一方でイタリア社会共和国を支持するファシストたちは同国人を「裏切り者」と呼び、その状況を「祖国の死」ととらえ<sup>42</sup>、他方パルチザン闘争を支えた勢力（行動党、社会党、共産党など）はその闘いを誇りつつも、戦後の体制がどのように選択されるのかを不安をもって注視していた。そして、先述のように、結局近代イタリア史上初めてカトリック系政党が議会の第一党となってゆくという錯綜した現実のなかで、《良きイタリア人》という表象は、そのときどきの政治的コンテクストから意味を備給されながら用いられていった<sup>43</sup>。今日ふたたび《良きイタリア

*Culture from Post-Unification to the Present*. University of California Press, 2003; Ruth Ben-Ghiat and Mia Fuller(eds.), *Italian Colonialism*. Palgrave Macmillan, 2005.

<sup>40</sup> Labanca, pp. 83-4.

<sup>41</sup> 秦泉寺友紀「イタリアにおける反ファシズムのネーションであることの困難——「宮廷クーデター」の記憶を手がかりとして」『日伊文化研究』第46号、2008年、63～4ページ。

<sup>42</sup> Salvatore Satta, *De profundis*. Padova, Cedum, 1948. 執筆は44～5年。

<sup>43</sup> Silvana Patriarca, *Italian Vices. Nation and Character from the Risorgimento to the Republic*. Cambridge University Press, 2010, pp. 189-190. 《良きイタリア人》言説の根深さについてはデル＝ボ



人》が歴史叙述に戻ってきているという状況は、当然、94年以降数度の中断をはきみながらも延命している中道右派政権が過去との「和解」キャンペーンを積極的に進めていることと深いかわりをもっている。しかし、近現代史叙述をめぐる変化と攻防は、ただせまい意味での政治的な変化のみを背景としているのではないのではないだろうか。主要にはファシズムの遺産をめぐる展開される歴史修正主義と植民地主義史研究が示している現状からは、戦後知識人が築いてきた知の制度そのものに対する反発が顕著に見られる。と同時に、近年その反発が新たな制度化へと拡大しつつあるという新しい局面が見えかくれしている。かつてデ＝フェリーチェはみずからの主張を、まさに「人びと」——知識人でもなく、特定の政党にも属さないふつうの人びとの名において展開したのであった。

#### 4. 歴史研究の「公的」環境

この15年間に中道右派政権の下で進められた新自由主義的経済政策は、イタリア社会に大きな変化をもたらしている。かつてイタリアの労働者と労働組合はヨーロッパでもっとも手厚い保障を獲得していたが、とくに金融危機以降、企業の要請に応じて政府が導入した労働市場の流動化政策によって、期間の定めのない派遣労働の合法化、企業との交渉・契約における個人裁量権の拡大（それは労働組合の団体交渉力の弱体化をもたらす）等の施策が導入された。こうした政策はとりわけ貧困層や若年層の雇用を危機的な状況に追いやっている。ローマ大学の歴史学教授であるピエロ・ベヴィラックアは、裕福でない市民が生活の基盤をおく郊外や地方と、都市の歴史的な中心部では、若者の知的形成に格差があることを指摘している。教育予算の削減によって厳しい運営を迫られる初等教育には、これを是正する余力もない。生活に疲れた両親と子どもたちのあいだには、知的・文化的

関心をはぐくむ対話も生まれない<sup>44</sup>。こうして若者のあいだには、知そのものに対する関心が育つ契機が失われている、というのである。

初等教育や家庭で文化についての価値観を得る機会を失った若者にとって、高等学校（リチエーオ：大学進学のための高等学校）と大学は伝統的な教養にふれる最初で最後の機会となるかもしれない。しかしその学校制度も、90年代末以来、大きな変化をこうむりつつある。99年にイタリア・ボローニャで採択された「宣言」にもとづく「ボローニャ・プロセス」の下での諸改革である。「ボローニャ・プロセス」は、建前のうえでは、「ヨーロッパの高等教育の競争力と魅力」を高めるため、2010年3月に加盟国47カ国で創設された「ヨーロッパ高等教育圏」において、学習成果の質的保障の枠組みにもとづくわかりやすく互換性の高いカリキュラムと学位制度（学士—修士—博士）を導入して、学生の流動性と雇用を促進することを目指すとしていた<sup>45</sup>。

この新しい方針にしたがって、学校と大学はニュー・パブリック・マネージメントの論理にしたがわなければならなくなった。すなわち、学校と大学は、市場原則にしたがい、現実のいかなるかけらも逃れることの許されないような新自由主義的なヴィジョンの命令にしたがって、競争を受け入れ、それに適応することを義務づけられたサービス目的をもたなければならなくなったのである。<sup>46</sup>

その結果、教員や学生たちの言語に、あるいは研究の組織にあたって、また文化的評価の基準において、変化が現れたという。文化的な価値をはかる道具としてクレジット *credito* (*credit*: 信用、貸方、評価) という金融用語が入り込んできたのである。言語のもつ力を十分に理解する人文学だからこそ、そうした言語的な転移が

一カルの著作も参照のこと。Angelo Del Boca, *Italiani, brava gente?* Vicenza, Neri Pozza, 2005.

<sup>44</sup> Piero Bevilacqua, *L'utilità della storia*. Roma, Donzelli, 2007[1997], p. 11-2.

<sup>45</sup> The official Bologna Process website 2010-2012. <http://www.ehea.info/>

<sup>46</sup> Bevilacqua, *op.cit.*, p. XIII.

及ぼす力を馬鹿げたものとして退けることはできない。若い世代は大学や研究を、経済のヴィジョンのなかで見るようになる。「言語は規則を体现する、ゆえに義務となる。こうしてクレジットは若者たちを、スーパーのレジで賞品をもらうために点数を集めるお客のように、得点を追いかけるようにさせてしまう」。たくさんの本を読み、じっくりと考察し、知のひとつの分野を深めてゆくという作業は、目標（教員になる、といった）への到達を時間や量で計測するテイラー・システムのようなものに変容してしまった<sup>47</sup>。いまや、先進資本主義国の高等教育はおしなべてこのベルト・コンベヤーにのせられつつあることはいまでもない。

修正主義は、知の制度をめぐるこの巨大な変化に背中を支えられている。ポローニャ・プロセスの説明のなかにはたびたび、*readable*（わかりやすい）、*compatible*（矛盾のない、互換性のある）という表現が登場する。この手軽さこそ、まさしく、「ふつうの人びと」に合わせるという諷刺文句で生産される、こころよい読み物のような歴史叙述の特色ではないだろうか。そこで提供されるのは、面倒な脚注もなく、複雑な議論も葛藤をもたらすようなエピソードも排された、読みやすく矛盾のない「おとぎ話」でしかない。

しかし、「ふつうの人びと」という名で呼ばれるナショナルな共同体には外部がある。「おとぎ話」は外部から食い破られるし、一部の人びとはみずから外へと目を向ける。イタリア政府は1956年にエチオピアと戦後賠償にかんする協定を結ぶが、これはダムや工場建設への投資というかたちで行われた。しかしこれによって、エチオピアにおけるイタリアの植民地主義の歴史が閉じられたわけではなかった。95年にエチオピア連邦民主共和国が成立すると、植民地期にイタリアに奪われたオベリスク（紀元3世紀建築）の返還運動が高まったのである。文化財返還は当初の協定に含まれていたが、イタ

リアは輸送費等を負担することを拒否していたため、返還は実施されていなかった。エチオピアでの運動の盛り上がりを受けて、2005年にイタリアはローマ市内におかれていたオベリスクを返還し、2008年には、かつてオベリスクが立っていたエチオピア北部の都市アクスムで返還・再建祝典がおこなわれた。こうしたできごとを経て、エチオピアに対する植民地責任の議論がイタリア社会全般で高まっているとはいふことは難しい。しかしエチオピア側は今後も文化遺産の返還を求めてゆく方針であり、それが侵略の過去についての議論をつねに刺激する要素とはなるであろう<sup>48</sup>。2008年にはイタリア政府とリビアのあいだで、植民地の過去にかんする賠償プロセスを定めた協定が交わされた。また、植民地問題についてはつねに強硬な姿勢を崩さない退役軍人や植民地帰還者の連盟組織のなかにも、小さいながらも変化が見られる。エチオピア戦争中の1939年に起こった、イタリア軍によるエチオピア民間人の虐殺事件を扱った著作について、退役軍人協会が発行する雑誌<sup>49</sup>に掲載された書評は、その事件は秘密でもなんでもなかったと指摘し、こう締めくくっている。

私たちはこの歴史を直接生きた最後の世代である。そして、真実と透明性を求める人に、真剣に向き合う心構えはできている。<sup>50</sup>

過去の複雑さに向き合うこと、時間をかけた対話をおこなうこと、それらを記述することは、今日ますます困難になりつつある。なぜならばそれは、競争原理や成果主義の言語によって内側から私たちを成型してゆく新自由主義の世界

<sup>48</sup> エチオピアに対するオベリスク返還については、2010年12月におこなわれたシンポジウム「文化財・人体の略奪と返還—植民地責任論の視点から」での、眞城百華氏（津田塾大学）の報告「エチオピアにおけるオベリスク返還とイタリア侵略・支配「責任」から多くを学んだ。記して感謝したい。

<sup>49</sup> Matteo Dominioni, *Lo sfascio dell'Impero. Gli italiani in Etiopia(1936-1941)*. Roma-Bari, Laterza, 2008. 「ゼーレト洞窟事件」と呼ばれるこの事件では、エチオピアの民間人が逃げ込んだ地下の洞窟にイタリア軍がイペリット・ガスを投下、爆発させて虐殺した。雑誌については注29参照。

<sup>50</sup> Labanca, p. 76.

<sup>47</sup> *ibid.*, p. XIV.

そのものにあらがう困難だからである<sup>51</sup>。

(おだわら りん・東京外国語大学海外事情研究所研究員)

---

<sup>51</sup> 本論ではイタリアにおける歴史修正主義をめぐる研究動向を、今日の新自由主義状況に位置づけて論じたが、「伝統的な」知の制度に誠実であることのみによって新自由主義－修正主義の圧力に知的に抗することができるのか、という問いは残されている。イタリアでの議論の展開も含めて、今後の課題としたい。